

## ② 生育の良い南半球産

### 【コロナからの回復過渡期】

2020年コロナ出現による先行き不透明感、作業要員確保の不安などから種球生産にブレーキがかかり、2023年南半球(SH)産は生産が減少し、且つチリの天候被害などで収穫量が減少しました。(日本の輸入球数等につきましては、23年9月21日付情勢報告、1月9日付植物検疫統計をご参照下さい。)

南半球の球根生産面積において、無加温栽培も多いアジアの旧正月需要が考慮されます。来年2025年の旧正月は1月で、南半球産を用いての切花栽培は今年のような暖冬でなければやや厳しいとされる日程です。そのため、NZのVZ社では2024年産の生産を1年栽培のみとし、小さい種球は2年栽培で2025年産に繰り越す調整がされました。

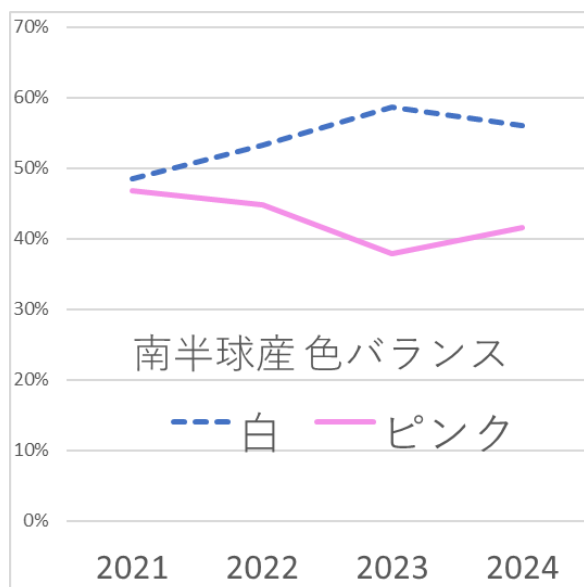
	旧正月 (無加温での切花)	対応する年産	球根生産 (天候)
2024年	2月10日 (間に合う)	2023年SH産	生産減少 (CH霜害)
2025年	1月29日 (やや厳しい)	<b>2024年SH産</b>	生産過渡期 (順調)
2026年	2月17日 (十分間に合う)	2025年SH産	生産回復

2025年産は脱コロナの回復期へと向かいます。今年取引の2024年南半球産は過渡期にあたり需要に対し不足気味ですが、両国とも気候や圃場状態が良いので結果に期待しています。

### 【シベリアが減少し、色物比率がやや回復】

生産者数が限られる南半球の生産情報は比較的精度が高く、今年からは私自身も現地の様子を確認しております(1月31日付南半球出張報告をご参照下さい)。

シベリアは上記のように25年産に標準を合わせ今年大きく減少し、弊社仕入の色比率(LA除く)は、白が前年よりやや下がることとなりますが、減ったとはいえ数年前に比べると増えている状況です(下表)。この白増加傾向はオランダ産でも同様で、近年、色物が減り過ぎ



て評価は下支えされている印象もあり、日本の花市場にとって心地よい色バランスと、将来的に消費者にとって魅力的な品種構成を考える時期が来ています。



シベリアは既にライセンスが切れている品種で、球根生産者にとって増産しやすいものの、需要が極端に中国に集中しており、今後も球根生産面積の大幅変動リスクは続きます。